

青年期の友人関係のルールに関する研究 —親友と友人に関して—

畠 山 寛

Hiroshi HATAKEYAMA : The Rules of Adolescent Friendships

本研究の目的は、現代青年期の友人関係を親密さの観点から親友と友人に分類し、それぞれに対してどのような関わり方やルールが存在するのかについて明らかにすることであった。大学生402名(男性213名、女性189名)を対象に検討した。その結果、①ルールには「親密さ」「自己呈示」「葛藤回避」の3つの構造的側面が存在すること、②それら3つの側面に対する評価の違いにより、親友、友人のそれぞれに3つの異なる関わり方があること、③親友や友人との関係が異なるルールによって統制されていること、さらに、④親友と友人では異なる関わり方であることが明らかにされた。

キーワード：ルール 友人関係 親密さ 青年期

1. 問 題

Harré & Secord¹⁾はインフォーマルな社会的状況におけるルールの役割を強調し、さまざまな社会的状況において、人間の行為がルールによって統制されていることを示した。また、Price & Bouffard²⁾は15の社会的状況を被調査者に提示し、15種類の社会的行動がどの程度適切であるかを評価させることによって、それぞれの状況で受容される行動の範囲が異なることを明らかにした。これらは社会的状況における人の行為には基準が存在することを示すものであると考えられる。

Argyle, Henderson, & Furnham³⁾は、ルールを「集団や、下位文化の成員によって、『すべきである』、または、『すべきではない』と考えられたり、信じられていたりする行動様式のこと」と定義し、人間関係には関係を統制するルールがあることを示し、それぞれの人間関係によってルールが異なるこ

とを明らかにした^{4), 5), 6)}。

ところで、青年期の友人関係には自我の安定化の機能、モデル化の機能、社会的スキルの学習機能があり⁷⁾、重要な対人関係の一つであると考えられる。さらに、青年期における親友との関係は、将来への不安や悩みをはじめ、生きがい、政治や社会など、さまざまな点について深く意見を交換するといった役割を持つため、非常に重要な関係であると考えられる。しかし、近年ではこうした関係のあり方が変化し、表面的で深く関わろうとしない青年が存在することが指摘されてきた^{7), 8)}。

友人との関わり方に関する研究において、心を打ち明けるといった「やさしさ志向」的関わり方⁹⁾や自己開示し積極的に相互理解しようとする関わり方^{10), 11)}など、従来の青年期の友人関係のあり方と考えられる関わり方が存在することが示された一方で、希薄化を示す「群れ志向」や「対人退却」といった関わり方が存在することも示されてきた⁹⁾。このように青年期の友人関係には幾つかの異なった関わり

り方が存在することから、友人関係の中には異なったルールによって統制されている関係が存在すると考えられる。しかし、これまでの友人との関わり方に関する研究では、ルールの観点からは検討されてこなかったため、青年期の友人関係にどのようなルールが存在するのかが明らかにされてこなかった。そこで本研究では青年期の友人関係について、ルールの観点からどのような関わり方が存在するのかを明らかにする。

また、これまでの関わり方に関する研究では、主に友人との関わりにおける深さや広さの次元の観点から明らかにされてきたため、青年期において特に重要であると考えられる親友との関係の在り方については明らかにされていない。友人関係には親友と友人が存在している¹²⁾ため、どのような相手に対してどのような関わり方があるのかを明らかにする必要があると考えられる。

以上のことから、本研究では、友人を親密さの観点から親友と友人に分けて、どのような関わり方やルールがあるのかを明らかにすることを目的とする。

2. 方 法

(1) 被調査者 広島県内の大学で心理学、社会心理学を受講する私立大学生402名(男性213名、女性189名)である。

(2) 質問紙構成 質問紙には、①親友に関するルール項目(43項目)、②友人に関するルール項目(43項目)を載せた。①、②のルール項目はArgyle & Henderson⁴⁾の43項目を使用した。回答方法は各項目について「すべきでない」と非常に思う：1から「すべきであると非常に思う：9」まで「どちらともいえない：5」を中点とした9件法で回答を求めた。

(3) 手続き 親友、友人の親密さを操作するため

に、親友を「あなたの同性友人の中で一番親しいと考える友人」とし、友人を「あなたの同性友人の中で順番をつけると4、5番目の友人」とすることを、被調査者に伝えた。

3. 結 果

(1) 因子分析

43のルール項目がどのような構造であるのかを検討するため、親友、友人のそれぞれについて因子分析を行った。主成分分析を行い因子を抽出した。因子数は固有値の推移、及び、因子の解釈可能性を考慮した。そして、負荷量.40以下の項目を除外し、再度、主成分分析を行い、その後、プロマックス回転を行なった。

1) 親友に対するルール項目の因子分析 因子分析(主成分分析、プロマックス回転)の結果、3因子を抽出した(Table 1)。

第1因子は28「相手にはいつもあたたかい思いやりを示す」、40「お互いに信用し、信頼しあう」、33「相手の精神的な支えになる」など親友に対して心を通わし、相手を気遣うことを示す計17項目で構成されているため「親友に対する親密さ」因子(以下、親友—親密)とする。第2因子は25「相手には最もよい自分の姿を見せるように努力する」、24「相手と一緒に時には、きちんとした小奇麗な服装をする」、9「相手の前では自分の怒りを表さない」など、自分の印象を管理することを示す計7項目で構成されているため「親友に対する自己呈示」因子(以下、親友—呈示)とする。第3因子は17「人前で相手を批判しない」、37「人前で互いに批判しない」、34「相手に対してうるさく文句を言わない」など、親友に対する批判や文句などを言わないようにすることを示す計8項目で構成されているため「親友に対する葛藤回避」因子(以下、親友—葛藤)とする。

それぞれの因子を尺度として利用するため、クロンバックの α 係数を求めた。 α 係数は「親友—親密」

Table 1 親友のルール項目因子分析結果

	第1因子	第2因子	第3因子
項目28	0.739	0.213	0.047
項目40	0.737	-0.137	0.051
項目33	0.696	-0.085	0.154
項目30	0.636	-0.114	-0.081
項目29	0.607	0.150	-0.334
項目38	0.603	0.065	0.151
項目41	0.584	-0.157	-0.044
項目39	0.575	-0.032	0.010
項目35	0.538	0.068	0.099
項目32	0.509	-0.017	0.169
項目22	0.495	0.103	0.127
項目04	0.481	-0.099	0.176
項目43	0.451	0.247	-0.010
項目12	-0.453	0.141	0.181
項目16	-0.454	0.241	0.134
項目36	0.429	-0.056	0.289
項目02	-0.406	0.225	0.003
項目25	0.209	0.770	-0.362
項目24	0.298	0.730	-0.291
項目09	-0.201	0.604	0.149
項目06	0.028	0.591	0.162
項目10	-0.298	0.566	0.194
項目08	-0.158	0.485	0.008
項目23	-0.138	0.478	0.212
項目17	0.092	-0.005	0.693
項目37	0.288	0.189	0.495
項目34	0.129	0.375	0.469
項目18	0.228	-0.120	0.453
項目15	-0.013	0.031	0.441
項目19	-0.083	0.193	0.437
項目26	0.060	0.113	-0.430
項目42	0.353	-0.092	0.425

Table 2 友人のルール項目因子分析結果

	第1因子	第2因子	第3因子
項目33	0.693	0.161	-0.017
項目39	0.662	-0.053	0.028
項目40	0.658	0.261	-0.132
項目35	0.648	-0.027	-0.045
項目41	0.610	-0.026	-0.129
項目29	0.593	-0.376	0.103
項目30	0.556	0.122	-0.199
項目28	0.555	0.280	0.198
項目04	0.522	-0.009	0.058
項目18	0.423	0.214	0.182
項目21	0.419	-0.359	0.145
項目02	-0.412	0.172	0.236
項目20	-0.194	0.645	-0.189
項目42	0.074	0.637	-0.061
項目37	0.043	0.632	0.158
項目26	0.032	-0.613	0.174
項目15	-0.174	0.607	0.101
項目31	0.325	0.572	-0.024
項目36	0.209	0.515	-0.096
項目19	-0.057	0.509	0.211
項目38	0.373	0.484	0.076
項目17	-0.002	0.449	0.343
項目05	0.012	0.416	0.141
項目25	0.276	-0.272	0.726
項目09	-0.116	0.045	0.673
項目24	0.281	-0.122	0.668
項目08	-0.207	0.046	0.652
項目06	0.124	0.009	0.644
項目10	-0.211	0.041	0.624
項目23	-0.093	-0.012	0.552
項目16	-0.377	0.104	0.435
項目07	-0.090	0.135	0.422

では.87,「親友一呈示」では.74,「親友一葛藤」では.68とある程度の信頼性が得られたためこれらの因子を尺度として利用する。

2) 友人に対するルール項目の因子分析 因子分析(主成分分析, プロマックス回転)の結果, 3因子を抽出した(Table 2)。

第1因子は33「相手の精神的な支えになる」, 39「相手と定期的に会う」, 40「お互いに信用し, 信頼しあう」など友人をサポートし, 定期的に合うことなどを示す計12項目で構成されているため「友人に対する親密さ」因子(以下, 友人一親密)とする。

第2因子は20「相手と性的な関係をもたない」, 42「相手の人間関係を妬んだり, 批判したりしない」, 37「人前で互いに批判しない」など, 友人に対して批判などを言わないようにすることを示す計11項目で構成されているため「友人に対する葛藤回避」因子(以下, 友人一葛藤)とする。第3因子は25「相手には最もよい自分の姿を見せるように努力する」, 9「相手の前では自分の怒りをあらわさない」, 24「相手と一緒にの時には, きちんとした小奇麗な服装をする」など, 友人の前で印象を管理する計9項目で構成されているため「友人に対する自己

呈示」因子（以下、友人—呈示）とする。

それぞれの因子を尺度として利用するため、クロンバックの α 係数を求めた。 α 係数は「友人—親密」では.74,「親友—呈示」では.71,「親友—葛藤」では.79とある程度の信頼性が得られたためこれらの因子を尺度として利用する。

(2) ルール尺度のクラスター分析

親友、友人の尺度の標準得点を使用し、親友、友人のそれぞれに対してどのような関わり方が存在するのかを明らかにするために、クラスター分析（K-Means法）を行った。クラスターの解釈可能性を考慮しながら分析を行った結果、親友、友人ともに3つのクラスターに分けられた。クラスターごとの各尺度得点の平均と標準偏差をTable 3、及び、Table 4に示す。また、クラスター間で分散分析、及び、多重比較（テューキーのHSD）を行った結果もTable 3、及び、Table 4に示す。分散分析の結果、全ての尺度得点で有意な差がみられた（ $p < .01$ ）。多重比較（ $p < .05$ ）の結果を親友から示すと、「親友—親密」得点が第3 < 第2 < 第1,「親友—呈示」得点では第2 < 第1 < 第3,「親友—葛藤」得点では第2 < 第3 < 第1の関係となった。友人では「友人—親密」得点が第3 < 第1 < 第2,「友

人—葛藤」得点が第1 < 第2 = 第3,「友人—呈示」得点が第1 = 第2 < 第3の関係となった。

各クラスターの特徴を見るため、各尺度の標準得点を使用して得られた親友のプロフィールをFig. 1に、友人のプロフィールをFig. 2に示す。まず、親友では、第1クラスターは「親友—親密」の程度が高く、「親友—呈示」は平均的で「親友—葛藤」が高いクラスターである。第2クラスターは「親友—親密」がやや高く、「親友—呈示」と「親友—葛藤」が低いクラスターである。第3クラスターは「親友—親密」が低く、「親友—呈示」は高く、「親友—葛藤」はやや低いクラスターである。

友人の第1クラスターは「友人—親密」が平均よりも低く、「友人—葛藤」が低く、「友人—呈示」はやや低いクラスターである。第2クラスターは「友人—親密」が高く、「友人—葛藤」がやや高い、「友人—呈示」はやや低いクラスターである。第3クラスターは「友人—親密」が低く、「友人—葛藤」が高く、「友人—呈示」が高いクラスターである。

(3) 親友、及び、友人のクラスターのルール評価

親友、及び、友人のクラスターごとの43項目のルール評価をTable 5に示す。Argyle & Henderson⁴⁾の手続きに従い、評価平均値が1～3の間に

Table 3 親友のクラスターにおける各尺度得点の平均と標準偏差

	第1クラスター	第2クラスター	第3クラスター	群間の分散分析と多重比較	
人 数	124	120	158		
親友—親密	116.70(12.98)	112.73(14.09)	91.43(11.35)	F=163.96**	第3 < 第2 < 第1
親友—呈示	27.12(9.01)	20.35(7.55)	32.72(7.52)	F= 82.01**	第2 < 第1 < 第3
親友—葛藤	56.10(6.21)	41.97(8.32)	44.33(6.25)	F=150.23**	第2 < 第3 < 第1

(注) ** $p < .01$

Table 4 友人のクラスターにおける各尺度得点の平均と標準偏差

	第1クラスター	第2クラスター	第3クラスター	群間の分散分析と多重比較	
人 数	139	122	141		
友人—親密	60.42(10.84)	76.16(8.28)	56.58(10.94)	F=133.23**	第3 < 第1 < 第2
友人—葛藤	59.62(9.44)	77.64(9.15)	79.92(9.09)	F=199.57**	第1 < 第2 = 第3
友人—呈示	38.74(8.95)	38.75(10.11)	55.24(8.56)	F=147.51**	第1 = 第2 < 第3

(注) ** $p < .01$

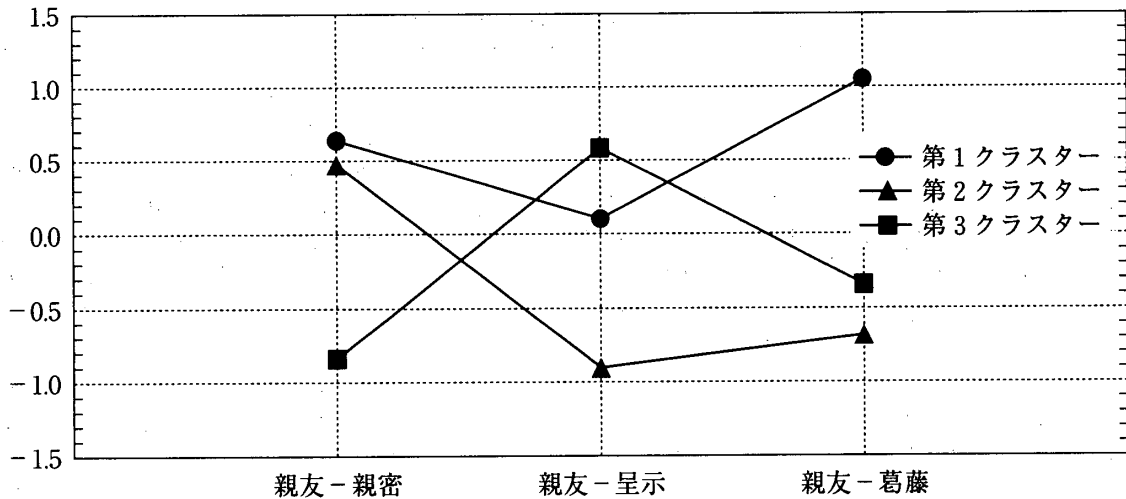


Fig. 1 親友に対する関わりクラスター

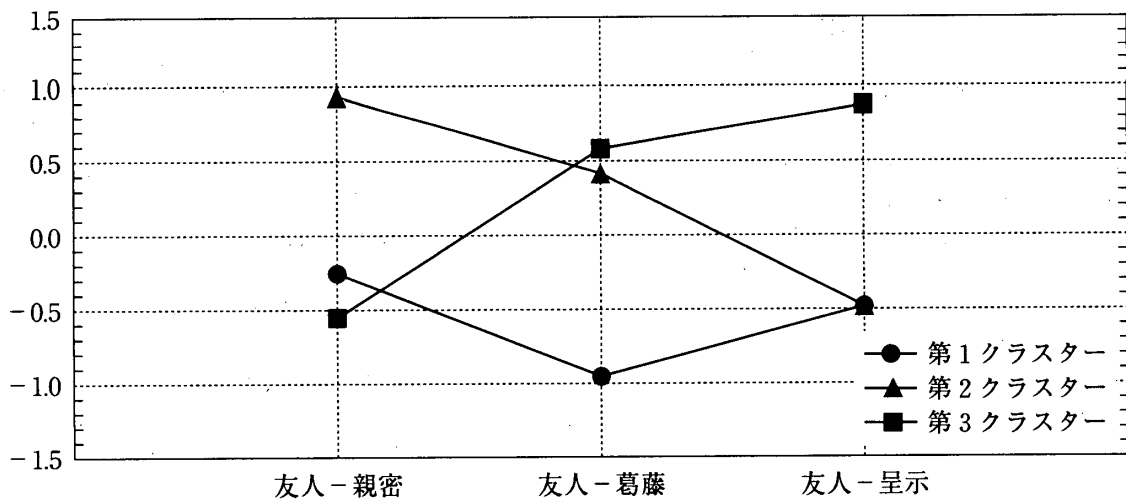


Fig. 2 友人に対する関わりクラスター

推移したものを「すべきではない」と評価された行動様式, 7~9の間に推移した項目が「すべきである」と評価された行動様式とする。親友の第1クラスターでは22項目, 第2クラスターでは17項目, 第3クラスターでは1項目がルールとして評価された。友人では, 第1クラスターでルールとして評価された項目はなく, 第2クラスターは11項目, 第3クラスターは10項目がルールとして評価された。

(4) 親友のクラスターと友人のクラスターの関連

親友のクラスターと友人のクラスターとの関連を検討するために, 親友, 友人クラスターをクロス集計し (Table 6), χ^2 検定を行なった。その結果, 人

数の偏りは有意であった ($\chi^2(4) = 71.27, p < .01$)。そこで残差分析をおこなった結果 (Table 7), 親友の第1クラスターでは, 友人の第1クラスターが少なく, 第2, 第3クラスターが多かった。親友の第2クラスターでは, 友人のクラスターに偏りはみられなかった。親友の第3クラスターでは, 友人の第1クラスターが多く, 友人の第2クラスターが少なく, 友人の第3クラスターは少ない傾向が見られた。

4. 考 察

本研究の目的は, 親密さが異なる親友と友人に対

Table 5 親友の各クラスター、及び、友人の各クラスターのルール項目の評価の平均値

ルール項目	親 友			友 人		
	第 1	第 2	第 3	第 1	第 2	第 3
項目01：相手を姓ではなく、名前で呼ぶ	<u>7.14</u>	<u>7.43</u>	6.35	5.65	6.45	5.66
項目02：相手には自分の気持ちや個人的な問題を打ち明けない	<u>2.68</u>	<u>2.59</u>	4.29	4.76	3.82	5.94
項目03：一緒に外で食事をする時など、相手分の支払いを申し出る	4.38	3.63	4.19	3.83	3.69	3.38
項目04：相手に誕生カードやプレゼントを贈る	6.69	6.50	4.75	4.19	5.64	3.93
項目05：事前に連絡しないで、相手の家を訪ねない	6.60	5.80	5.67	5.30	6.97	<u>7.47</u>
項目06：相手が一緒にいるときには下品な言葉遣いをしない	4.23	<u>2.99</u>	4.81	4.32	4.62	6.09
項目07：宗教や政治の話題について相手と話をしない	4.68	3.90	4.52	4.42	4.83	6.50
項目08：性や死の問題について相手と話をしない	3.19	<u>2.60</u>	4.43	3.91	3.55	6.28
項目09：相手の前では自分の怒りをあらわさない	3.69	<u>2.40</u>	4.75	4.35	4.38	6.64
項目10：相手の前では心配事や不安をあらわさない	3.46	<u>2.13</u>	4.53	4.61	4.12	6.70
項目11：相手の指示には従う	4.79	4.60	4.51	4.32	4.38	4.28
項目12：人前では相手への親愛の情を示さない	3.48	3.11	4.51	4.27	3.60	4.91
項目13：相手と会ったときには握手（お辞儀）をする	4.83	4.45	4.93	4.55	5.47	5.04
項目14：相手の体にわざと触らない	4.76	3.57	4.87	4.56	5.11	6.36
項目15：相手に物質的な援助を求めない	6.48	4.64	5.13	4.65	6.30	<u>7.19</u>
項目16：相手に個人的なアドバイスを求めない	<u>2.59</u>	<u>2.23</u>	4.04	3.84	3.48	5.88
項目17：人前で相手を批判しない	<u>7.43</u>	5.04	5.32	4.68	6.07	<u>7.21</u>
項目18：相手がいない所では、相手のことを弁護する	<u>7.36</u>	5.69	5.63	5.01	6.20	5.67
項目19：他人の秘密を相手と話さない	6.45	4.95	5.57	5.01	6.82	<u>7.57</u>
項目20：相手と性的な関係をもたない	<u>8.06</u>	<u>8.23</u>	<u>7.44</u>	6.74	<u>8.21</u>	<u>8.60</u>
項目21：家族の祝い事には相手を招待して一緒に食事をする	4.69	4.53	3.99	3.76	3.73	<u>2.72</u>
項目22：どんなに小さい事でも借りや好意、賛辞にはお返しをする	<u>7.73</u>	<u>7.46</u>	6.16	5.87	<u>7.10</u>	6.48
項目23：相手に冗談を言ったり、からかったりしない	3.46	<u>2.50</u>	3.96	3.89	3.80	5.28
項目24：相手と一緒にの時には、きちんとした小奇麗な服装をする	4.96	4.22	5.32	4.78	5.15	6.12
項目25：相手には最もよい自分の姿を見せるように努力する	4.14	3.52	4.92	4.61	4.83	5.75
項目26：遠慮しないで相手の時間を欲しいだけ取る	<u>2.51</u>	3.68	3.63	4.02	<u>2.56</u>	<u>2.54</u>
項目27：相手と個人的な金銭の問題について話し合わない	5.60	3.61	4.80	4.68	4.87	6.57
項目28：相手にはいつもあたたかい思いやりを示す	<u>7.69</u>	<u>7.00</u>	5.91	5.30	<u>7.30</u>	6.29
項目29：相手には自分の個人的なスケジュールを知らせる	5.75	6.03	4.91	4.45	5.22	3.36
項目30：自分の成功の喜びを相手と分かち合う	<u>7.65</u>	<u>7.84</u>	6.19	5.79	<u>7.34</u>	5.41
項目31：相手のプライバシーを尊重する	<u>8.43</u>	<u>7.57</u>	6.99	6.35	<u>8.01</u>	<u>7.73</u>
項目32：話をする時には相手の目を見る	<u>7.61</u>	<u>7.23</u>	6.09	5.79	<u>7.14</u>	6.64
項目33：相手の精神的な支えになる	<u>8.02</u>	<u>7.48</u>	6.00	5.56	<u>7.20</u>	5.52
項目34：相手に対してうるさく文句を言わない	<u>7.04</u>	4.96	5.54	5.18	6.49	6.84
項目35：相手が病気の時には世話をする	6.98	6.70	5.74	5.33	6.60	4.72
項目36：お互いの友人については寛容である	<u>7.12</u>	6.51	5.81	5.42	6.95	6.30
項目37：人前で互いに批判しない	<u>7.03</u>	5.50	5.41	4.85	6.63	<u>7.00</u>
項目38：お互いに誠実である	<u>7.53</u>	6.52	5.68	5.20	6.98	6.32
項目39：相手と定期的に会う	<u>7.08</u>	6.89	5.51	5.07	6.48	4.70
項目40：お互いに信用し、信頼しあう	<u>8.31</u>	<u>8.13</u>	6.16	5.45	<u>7.57</u>	5.52
項目41：必要な時には進んで援助を申し出る	<u>7.41</u>	<u>7.27</u>	5.42	5.27	6.72	4.67
項目42：相手の人間関係を妬んだり、批判したりしない	<u>8.25</u>	6.76	5.97	5.42	<u>7.26</u>	<u>7.08</u>
項目43：一緒にいるときには友人を楽しくさせるように努力する	<u>7.53</u>	6.96	6.15	6.16	<u>7.61</u>	6.43

(注) 平均値 1～3 の範囲 (すべきでない)、及び、7～9 の範囲 (すべきである) を太字・下線で示す

Table 6 親友・友人クラスターの度数と期待度数

	友人—第1	友人—第2	友人—第3	計
親友—第1	12(42.87)	58(37.63)	54(43.49)	124
親友—第2	39(41.49)	41(36.41)	40(42.09)	120
親友—第3	88(54.63)	23(47.95)	47(55.41)	158
計	139	122	141	402

Table 7 Table 6の調整された残差

	友人—第1	友人—第2	友人—第3
親友—第1	-7.01**	4.78**	2.37*
親友—第2	-0.57	1.09	-0.48
親友—第3	7.16**	-5.54**	-1.79*

(注) ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

して、どのような関わり方やルールがあるのかを明らかにすることであった。

(1) 親友、及び、友人のルール項目の因子について

親友、及び、友人に対するルールの因子分析の結果から、親友、友人に共通して「親密さ」、「自己呈示」、「葛藤回避」の3つの構造が存在することが示された。これは親密さが異なる親友、友人との関わりであっても、関係を構成する基本的な構造には大きな違いが無いことを示していると考えられる。

しかし、因子抽出の順序では、親友が「親密さ」、「自己呈示」、「葛藤回避」の順で、友人では「親密さ」、「葛藤回避」、「自己呈示」の順と異なっていた。これは、親友、友人に共通して「親密さ」が最も重要となるものの、2番目に重要となるのが自己の見せ方か葛藤の回避であるのかで異なっている。つまり、親友では「葛藤回避」よりも「自己呈示」が、友人では「自己呈示」よりも「葛藤回避」が重要になると考えられる。

さらに、親友、友人のそれぞれの因子を構成する項目に違いがみられた。例えば、項目16、36、38は、親友に対しては「親密さ」を構成するものであるが、友人に対しては項目16が「自己呈示」を、項目36、38が「葛藤回避」を構成するものとなっている。また、友人で「親密さ」を構成している項目18は、親友では「葛藤回避」を構成している。これは

同じ行動様式でも親密さが異なる相手では異なった意味を持つ行動様式になることを示していると考えられる。これに加え、親友、友人のそれぞれの因子にのみみられる項目も存在した。例えば、親友の「親密さ」では項目32、22、43、12など計4項目である。このような項目は、親友や友人のそれぞれに対してのみ意味のある行動様式であると考えられる。

本研究で得られたこれらのルールの構造は、これまでの友人との関わり方に関する研究⁹⁾¹⁰⁾などで明らかにされた友人関係の広さや深さの次元とは異なったものであり、他者との関係を考慮することで初めて得られる構造であると考えられる。

また、親友や友人に対する「親密さ」は、相手を気遣うことで相手に対して正の報酬をもたらすことを示していたり、「葛藤回避」は不快な思いをさせないといった負の報酬を与えないことを示していると考えられる。そして、「自己呈示」は関わりにおいて、自分が傷つかないようにするといった自己防衛的側面が強いものであると考えられる。このことから、3つの構造のうち、2つは相手に対する配慮の側面であり、1つは自分に対する配慮の側面であると考えられる。

(2) 親友、友人のクラスター、及び、各クラスターのルール評価について

親友の第1クラスターは「親友—親密」と「親友—葛藤」が高いといった特徴をもつ。このことからこのクラスターは、親しく関わる一方で不快な思いをさせないなど、親友に対する配慮が非常に高いと考えられる。このクラスターの個別のルール評価では、ルールの数が最も多いことから、関係が最も統制されていると考えられる。特に親友の他のクラスターと比較し、葛藤を回避すると考えられるルールが多く存在することがこのクラスターの特徴であると考えられる。

第2クラスターは、「親友—親密」が高く、「親友—呈示」と「親友—葛藤」は低いといった特徴をも

つ。このことから、このクラスターは親友との関わりにおいて、親しくはあるが、自分や相手が傷つくことに対する配慮は低いと考えられる。このクラスターの特徴として項目8, 9, 10が「すべきではない」と評価されていることから、素の自分を相手に示すクラスターであると考えられる。

第3クラスターは、「親友—親密」と「親友—葛藤」が低く、「親友—呈示」が高いという特徴をもつ。このことから、このクラスターは親友との関わりにおいて、自己の印象を管理することのみが配慮されていると考えられる。また、個別のルール評価では項目20以外にはルールとして評価されていないことから、特に、このクラスターは親友に対して関わりがないといった特徴をもつと考えられる。

友人の第1クラスターは、「友人—親密」、「友人—葛藤」、「友人—呈示」のどれもが低いといった特徴をもつ。このことから友人に対して関わることなく、自己が傷つくことにも配慮がない。個別のルール評価においても、ルールとして評価された項目がないことから、友人との関わりが全く見られないと考えられる。

友人の第2クラスターは「友人—親密」と「友人—葛藤」が高く、「友人—呈示」は低いといった特徴をもつ。このことから、友人に対して親しく関わり、そして、友人が傷つかないように配慮すると考えられる。また、自分が傷つくことに対する配慮は低いと考えられる。個別のルール評価では、11項目がルールとして評価され、項目33, 40などが評価されていることから、他の友人のクラスターと比較すると特に心を通わすクラスターであると考えられる。

友人の第3クラスターは、「友人—親密」が低く、「友人—葛藤」、「友人—呈示」が高いといった特徴をもつ。このことから友人と親しく関わらないが、自分や友人が傷つくことを避ける関わりであると考えられる。個別のルール評価では10項目がルールと評価され、他のクラスターと比較し項目5, 15, 17など葛藤を回避する関わりであると考えられる。

以上にみられるように、親友、友人のそれぞれにいくつかの異なった関わり方が存在することが示された。また、親友、友人に共通してみられる関わり方はなく、親友と友人では異なった関わり方であると考えられる。そして、それらの関わり方は異なったルールで統制されていることも示された。

親友の第2クラスターのように親しく関わり、自己の姿を見せるといった、これまでの青年期の友人関係のあり方と考えられてきたクラスターがみられたものの、一方で、親友の第3クラスターのように自己呈示のみが高いクラスターがあり、岡田⁹⁾が示した「対人退却」に近い関わり方を示すものもみられた。このことから、ルールの観点においても親友に対して親しく関わらない関係があると考えられる。また、友人においては3つのうち、2つが親しく関わらないことを示すクラスターであった。このことは、研究の手続き上、親密さを操作したために、被調査者の中で明確に行動様式の違いが意識化された可能性がないとは言えないが、親密さが低い友人においては、特に、親しい関わりがみられなくなると考えられる。

これまでの友人との関わり方の研究では、関わり方に影響する要因として、対人恐怖的心性⁹⁾、自己愛傾向と自尊心¹³⁾など自己の諸特性との関連が考えられてきた。しかし、ルールといった自己の特性とは異なり、多くの人によって共有されている外的な基準によっても関わり方が規定されていることが示されたのは大きな知見と言える。このことから、幼児期、児童期を通して友人関係のルールが学ばれてきた結果として、青年期の友人関係のルールが存在するとすれば、友人関係において異なったルールがどのように学習されてきたのかを検討することも今後の課題であると考えられる。

(3) 親友のクラスターと友人のクラスターの関連

親友の第1クラスターでは、友人の第1クラスターが少なく、第2, 第3クラスターに多いといった偏りがみられた。これは親友に対して「親密さ」

や「葛藤回避」を示す関わり方をする者は、友人に対してもどちらかの側面を重要視していると考えられる。

親友の第2クラスターでは、友人のクラスターに偏りはみられなかった。このことは親友に対して、親しく関わり、自己や相手が傷つくことに抵抗がない関わり方をする者は、友人に対する関わりにも特定のこだわりがないと考えられる。

親友の第3クラスターでは、友人の第1クラスターが多く、第2、第3クラスターが少ない偏りを示した。これは、最も親密である親友に対しても自己を防衛する関わりを示す者は、親密さが低い友人にも関わりそのものが少なくなることが考えられる。

5. 本研究のまとめ

本研究において次の点が明らかになった。①友人関係に関するルールの側面には「親密さ」「自己呈示」「葛藤回避」の側面があること、②それら3つの側面の評価の違いにより、親友、友人にはそれぞれ3つの異なる関わり方があること、③異なった関わり方は、異なるルールによって統制されていること、④親友に対する関わり方と、友人に対する関わり方が異なることである。

今後は、同性友人関係の男女差や、異性の友人関係などについて検討することが、青年期の友人関係をより一層理解するためには必要であると考えられる。

引用文献

- 1) Harré, R., & Secord, P. The explanation of social behavior, (Oxford: Blackwell, 1972).
- 2) Price, R.H., & Bofford, D.L. "Behavioral appropriateness and situational constraint as dimensions of social behavior", *Journal of Personality and Social Psychology*, 30 (1979), p. 579-586.
- 3) Argyle, M., Henderson, M., & Furnham, A. "The rule of social relationships", *British Journal of Social Psychology*, 24 (1985), p. 125-139.
- 4) Argyle, M., & Henderson, M. "The rules of friendship", *Journal of Social and Personal Relationships*, 1 (1984), p. 211-237.
- 5) Henderson, M., & Argyle, M. "Endorsed and applied rules of relationships reported by teachers", *Oxford Review of Education*, 10 (1984), p. 193-202.
- 6) Henderson, M., & Argyle, M. "The Informal rules of working relationships", *Journal of Occupational Behavior*, 7 (1986), p. 259-275.
- 7) 松井 豊「友人関係の機能」, 斎藤耕二・菊池章夫『社会化の心理学ハンドブック』, 川島書店, 1990, 283-296.
- 8) 千石 保『「まじめ」の崩壊：平成日本の若者たち』, 東京：サイマル出版会, 1991.
- 9) 岡田 務「現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」の関係」, 『発達心理学研究』4 (1993), 162-170.
- 10) 榎本淳子「青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化」, 『教育心理学研究』47 (1999), 180-190.
- 11) 落合良行・佐藤有耕「青年期における友達とのつきあい方の発達的变化」, 『教育心理学研究』44 (1996), 55-66.
- 12) 石川英夫「大学生の友人関係についての一考察」, 『東京経済大学人文自然科学論集』68 (1986), 1-41.
- 13) 小塩真司「青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連」, 『教育心理学研究』46 (1998), 280-290.